百人女郎品定

『百人女郎品定（ひゃくにんじょろうしなさだめ）』は、江戸時代の各階層における女性風俗 100 種を描いた絵草子です。

公家・武家・町人・遊女と実にさまざまな身分・職業の女性像が、流麗な筆致で描き分けられています。

公家の女性

描いたのは、上方で活躍した西川祐信（すけのぶ）（1671～1750）という町絵師で、狩野永納（えいのう）（1631～1697）や土佐光祐（みつすけ）（1676～1710）に学び、さらに江戸で流行していた菱川師宣（もろのぶ）（1618～1694）や鳥居清信（きよのぶ）（1664～1729）らの画風も取り入れ、あらゆる画技をマスターしました。とりわけ品のある丸顔の美人画には定評があります。

江戸時代中期は、女性の身分や職種を分類して編集する百科事典のような書物が流行し、この本もその流れで人気を得ました。また、絵本という体裁でしたので、娯楽性が高く庶民への関心も高まったといいます。特に『百人女郎品定』は当時大変評判がよかったようですが、皇后と遊女をひとつの本に合わせて掲載したため、絶版の憂き目にあったともいわれています。

また、祐信は『正徳雛型』や『西川ひな形』など、小袖文様の図案集として当時流行していた江戸時代版ファッションブック「小袖雛形本」を数多く手がけていました。『百人女郎品定』でも身分によって異なる衣裳が多彩な文様とともに楽しめるのも魅力です。江戸時代中期以降は、染織技術が発達しさまざまな意匠が花開きましたので、登場人物のきものに対する注目度も高く、祐信はその才能を発揮することとなりました。

花街の女性

上の図は、現代の文化サロンというべき京都の嶋原にある花街の女性六人が描かれています。先頭を歩く「太夫（たゆう）」は遊女の中で最高位にあり、美貌と教養を備えた女性です。続く「新ざう（しんぞう）」は若い水揚げ前（見習い）の芸妓、「引舟（ひきふね）」は太夫に付き添い客を取り持ち、「かぶろ（かむろ）」は舞妓修業の少女。傘をかざす「やりて」は、遊女を手配する中年女性。座り込んでキセルをふかす「局女郎（つぼねじょろう）」は最下位の遊女。華やいだ雰囲気に衣ずれの音も聞こえてきそうな一場面が描かれています。

（2016 年 2 月 5 日公開）